



## VERITAS No.49 (2012.3.29)

おわりとはじまり

今回のテーマは〈おわりとはじまり〉です。  
春は出会いと別れの季節。  
皆さんはどんな想いでこの時期を迎えますか？

### 〈特集に寄せて〉

濱下 昌宏 図書館長 総合文化学科教授

日本の大学の新学期を9月から、という議論が喧しくなっていますが、まだ従来の学年暦で一年を過ごしている私たちには、春は3月に卒業生を送り出し、そしてすぐに4月には新入生を迎えるという季節です。ひとつの年度が「おわり」、新しい年度が「はじまり」、そしてその間の短い春休みでしばしのくつろぎを得て、気分と暦と装いをフレッシュにする、というわけです。併行して、その転換を寿ぐのが桜の花です。見事に咲いて散るのは、そのつかの間の転換のときを象徴しているように見えます。

卒業生にとって、3月は学生として「おわり」の月、そして社会人として4月は「はじまり」です。別れと新しい出会いの時です。自分にとっても古い自分に別れを告げ新しい自分への出発です。それは自分の意志とは別にただ社会的慣習に即して自分の人生のページをめくるようなものです。そうは言いながら学生から社会人へという転換には相当な覚悟と勇気が求められています。それでも、新しい環境への挑戦と順応を経験して、ときに夢と希望で新天地の空気を大きく吸い込み、またときに心労と失望と理不尽と闘いながらも、自分の心と精神を豊かにする糧を蓄えて欲しいものです。

あるいは、「おわり」と「はじまり」は恋につき物です。出会いがあるから別れがあるのは必然です。今様に軽く言うなら「元カレ」と「今カレ」(そんな言い方がありますか?)への気軽な(?)乗り換え、とでも言うのでしょうか。しかし、こんな言い方をすると学生たちから怒られそうです、恋の真摯さをからかうようで。

用事で梅田に出て時間があれば、あるいは東洋陶磁美術館にでも出かけての帰りに、お初天神に足を延ばすのは梅田界隈ならではの楽しみです。外国からの客人と夕食を共にして若干の酩酊状態でお初天神を案内して狭い境内を歩きながら近松浄瑠璃の話をしてあげると皆さんは感心します。梅田の、とくにお初天神通りの享楽の巷を抜けたところに静寂の境内と、そして衝撃のドラマを知るのは、よい日本美学の実習となり、日本文化の二重構造の実際を知ることになります。「誰(た)が告ぐるとは曾根崎の 森の下風音に聞(きこ)え 取伝へ 貴賤群集(くんじゅ)の回向(えこう)の種 未来成仏疑ひなき 恋の手本となりにけり」という世話浄瑠璃『曾根崎心中』の末尾は、何度読み返しても胸に響きます。

心中というのは、むろん殉死とは別ですが、自殺そのものがキリスト教では許されていない西欧社会にあっても、関心をよんでいたようです。辰野隆(1888-1964)のエッセイ「感傷主義」(『忘れ得ぬ人々』講談社文芸文庫、所収)を読んでいたら、20世紀初頭にフランス社会党の有力な領袖であった人物(ジャン・ジョレスのことか?)が亡くなった時に(暗殺事件であったはず)、翌日にその夫人の訃報が伝えられたらしい。「夫人は日頃仏訳された近松の悲劇を愛読して愛する男の死に欣然として従う日本婦人の志に深き憧憬の念を抱いていたという噂」を当時パリ留学中の辰野は新聞で読む。(こんなところにもジャポニスムの影響があったのかと興味を引く。)

エッセイのタイトル「感傷主義」は、リラダン(Villiers de l'Isle-Adam, 1838-1889)の短編“Sentimentalisme”(『残酷物語』Contes cruels)を基にしています。それは心中をテーマにしてはいませんが、深い哀切感へと読む者を導いてくれる掌編です。ぜひ一読をお勧めします。主人公の男女は教養も高い美男美女であるけれど、高貴な身分でもある男性は芸術的感性に恵まれた人物で、そのために婦人の方は男性の感情がいつも芸術的に加工され虚構のように冷たくなっているようで違和感を募らせていき、半年の交際の後、ついに別れを口にします。男性に言わせれば、俗人の獣的な感情は芸術的なそれとは差異の問題ではなく無限の距離があるのだ、と答えますが、男性はその別れの提案を受け入れ、そして帰宅後拳銃自殺します。その後の婦人は黒い服を常用し、周りからその理由を訊かれると「だって私は黒が似合うのですもの」と答えるばかりであった、というのが結びです。

「おわり」と「はじめ」をテーマにするときに、このリラダンの逸品を思い出したのは、「おわり」から「はじめ」への両者の連続と断絶への質的転換について考えたからです。あきらかに主人公の女性は新生を生きることになります。しかも思い出の中に恋人（の影）を持続させます。私たちの人生や社会生活もそのようでありたいものです。所属が変わり生活のリズムを変更するだけでは矜持の所在が疑われます。断絶と持続、そのせめぎ合いの中に喜びと悲しみを体験して、私たちの人生を見つめる眼差しはいつそう豊かさを深めるのでしょうか。そのようにして生活の質を上げ、精神の高みへと一歩進むのでしょうか。

リラダンを愛好してやまなかった文学者斎藤磯雄の随筆集『ピモダン館』（廣済堂出版、昭和45年）は私の秘蔵書の一冊ですが、口絵写真は「ヴィリエ・ド・リラダンの墓に菊花を献げる著者」となるともキザったらしい懲りようです。パリのペール・ラシューズ墓地にリラダンの墓を探し求めた著者は荒廃して墓石の紋章も摩滅している第79区にあるその墓をやっと見つけ、「一切の虚しい装飾を絶ち、簡素の極、おのづから森厳。——跪いて拝し、遠く東洋の果てなる国より一崇拜者の来れるを告げた」と書いています。フランス第三共和制の時代に生き、科学信仰の実証主義、功利主義、唯物論の風潮の最中に、リラダンは全面的にそうした時代思潮に対決しました。貴族の家系ながら貧窮をきわめ、転々と宿を追われるような生活のために多くの原稿すら失われるという生涯を送ったリラダンですから、昔も今も少数の炯眼の士の読者しか得なかったのも当然でしょう。リラダン家の高貴な家系と同じく、今や彼の精神的貴族主義も断絶してしまったかのようです。リラダン家の銘はVA OULTRE という古語です。それは斎藤磯雄に訳させると「一切の彼方に行け、限界を越えて進め」となります。断絶は「おわり」ではなく、一歩飛躍のための条件なのでしょう。

私がペール・ラシューズ墓地を訪れたのはもう5年くらい前だったでしょうか、秋雨の冷える中を震えながらショパン、バルザック、オーギュスト・コント、といった墓に出会いながら寒さに耐え切れずに早々に外の通りに出ましたが、あのときはとてもリラダンの墓を探す元気はありませんでした。きっと第79区近くは歩いたはずですが、私がすでにリラダンの高貴さに憧れすら持たなくなっていたというわけではないのですが、ただただ寒さのあまり、にぎやかな大通りのぬくもりを求めたのでした。

おわりとはじまり

松尾 歩 英文学科准教授

What we call the beginning is often the end And to make an end is to make a beginning. The end is where we start from. Thomas Stearns Eliot. 今4年生の皆様が1年近くを費やして書かれた卒業論文を読ませていただいています。卒業論文を読みながら、終わりとはじまりについて考えさせられることが多くありました。おわりと言って一番に私の脳裏に浮かぶ思い出は博士論文を終えた時でした。博士論文は卒業論文と同じような大物ですが、その数倍の時間をかけて完成させる論文で、私のアメリカ生活の集結となるものでしたので、大きなプレッシャーがあったことを今でもひしひしと思い出させられます。けれどもその大作を完成させられるかどうかというよりも、論文を終えてその後どうなるのか、ということ自体にも、私には多大なプレッシャーとなっていました。3年ほど前から興味のある言語学のトピックについて論文を書き始め、3年間それ以外のことを考える暇もなく明け暮れて論文に全力投球をしていた20代後半。今から考えるとなんて贅沢な時間を費やすことが許されたんだらう、と信じられませんが。けれどもある日、3年間同じことばかり考え続けてきた自分に疑惑と不安が襲ってきたのです。何日か考えた後、主査のアメリカ人の教授に相談しました。「私、この論文が終わって言語学者としてやっていけるのか、そしてこの論文以外の他の研究課題についても論文が書けるかどうか自信がない。」と先生に相談してみました。長い間同じことをやってきたので今度さて新しいことが本当に始められるのか、という心配があったのです。主査の先生はにっこり笑って「大丈夫だよ。歩なら、あれこれいろんなトピックについて研究をはじめて、きっと1つのことに集中できないほど多方面に手を伸ばしすぎるんじゃない？」と即答してくださいました。

読者の皆さんの中には私のように慣れ親しんだ生活を終えることを恐れている人がいらっしゃるかもしれません。私はその皆さんの背中を押して「大丈夫よ！」と新しい世界に送り出す手助けをしたいと思います。

最後に、私は言語学者ですので、ここで少しだけ研究内容の言語学のことについて書かせていただきます。動詞には終わりとはじまりがきちりと意味に含まれている種類の動詞があり、それを英語では Telic (限界的) と呼びます。例としては「家を建てる」「財布を見つける」「テストを受ける」など、これらの動詞は特に終わりの点がはっきりとしています。けれども、終点が曖昧な動詞もあります。これらは、Atelic (非限界的) と呼ばれ、「好きだ」「学ぶ」「努力をする」「お母さんに似ている」など、いつ終わるのかの情報があっ

りと動詞の中に含まれていません。例えば、私たちはいつ「学ぶ」のを終えるのでしょうか？大学を卒業した時でしょうか？この様に、いろいろと動詞の種類について考えていると、なぜだか Atelic の動詞の中には人生において大切な意味を持つ動詞が多く含まれているような気がします。

学生の皆さん、動詞の話がしたかったら、いつでも私の研究室のドアをノックして下さいね！

神戸女学院での「はじまり」の「おわり」

河西 秀哉 総合文化学科専任講師

VERITAS 本号の特集テーマは「おわりとはじまり」です。2011年4月に神戸女学院大学文学部総合文化学科に赴任してきた私にとって、この文章を書いている今（2012年2月）は、「はじまり」の年の「おわり」近くに差しかったところになります。この1年間で私が神戸女学院について感じたことを書いてみるのも、このテーマに合うだろうかと考えました。

まず神戸女学院と言えば、誰もがキャンパスの美しさということを描くと思います。たしかに私もその一人なのですが、そうした建物の外見だけではなく、その中身の充実さも驚くべきものがあります。例えば、図書館です。（決して、図書館の VERITAS に書いているから、ごまをすっているわけではありません。念のため。）行くたびに驚かされます。「え！こんな本もあるの!？」と。私はこれまで、資料調査や学会での出張などで、多くの大学図書館に行ってきました。その経験と比較すると、たしかに何万人も学生がいるような大学の図書館とはその規模が違いますが、それでも同じくらいの他の大学よりも女学院の図書館の蔵書数は多いように、そして充実しているように感じます。学術書、例えば私が専攻している日本近現代史では、出版された時の初版数が3~500で、それが売り切れてしまったらもう追加で増刷されないケース（数年経てば購入することができなくなってしまうわけです。）が多いと言われます。つまり、全国で数百冊しかない本、というのが意外に多いのです。その結果、見たいと思って自分の大学の図書館に行ったところ、その本が所蔵されていなかったということはよくあります。そんな貴重とも言える本（私からのどから手が出るくらい欲しいものも!）を、女学院の図書館では何冊も見かけました。おそらく、出版された時に先生方や図書館の職員のみなさんが重要だと考えて、購入してくださったものと思われます。これは先人から受け継いだ貴重な財産でしょう。私はその恩恵にこの1年、感謝しきりでした。

そんな貴重な財産を、もっと活用して欲しいという思いも、この 1 年で感じたところだ。今年度、ゼミなどの発表で、参考に URL のみがあがっていて、本は一冊もあがっていないレジュメをいくつか見ました。たしかに、インターネットの世界は無限で、そして便利です。知りたい検索語を放り込めば、瞬時に関係のページにたどり着くことができる。私もよく使いますし、ネットのおかげで研究のスピードが格段にあがったことは事実です。ですが、先程述べた神戸女学院の貴重な蔵書が使われないのは、せっかくこの学校にいるのに、もったいないと思うのです。検索語を入れるとすぐに出てくるネットは、意外にこの検索語をうまく思いつかないと、知りたい情報そのものにたどり着かないことがあります。ところが、本は内容ごとに分類されて配架されていますから、例えば日本近現代史の本を探していてそのコーナーに行ってみると、意外にすぐに見つかることがあります。また、その時にふと手に取った隣の本に、実は必要な情報が含まれていた、自分では思いつかないような視点が書かれていてそちらの方が面白かった、などというケースはよくあるものです。(実は私自身、元々は政治の歴史に興味がありましたが、ふと図書館で探した本をきっかけに、人々の思想の歴史に関心がシフトし、今に至っています。この経験が無ければ、現在私は大学教員などをやっていなかったかもしれません。)そして、瞬時に答えを求めるのではなく、本を読んでゆっくりと考えを深めていく、その方が自身の考えが多面的となり、思索に満ちたものとなるようにも私は感じます。岡田山はまさにその経験をするのにふさわしい雰囲気を持っていると思います。

なんだか、最後はやや教師からの説教じみた話になってしまいました。劇作家であり詩人であった寺山修司は、『書を捨てよ、町へ出よう』という評論を書いて、発表当時とても話題になりました。ですが、私はぜひみなさんに「書を読んでから、町へ出よう」と言いたいと思います。神戸女学院での「はじまり」の「おわり」に、この 1 年で感じたことを率直に書いてみました。

おわりは次のはじまり

田島 孝一 心理・行動科学科准教授

「会うは別れのはじめ」ということばがあります。だれ人も別れを免れることはできませんし、何事においても、いつか別れは訪れます。このたび私も退職の時を迎え、これに合わせて原稿を書く機会をいただいたことは、大いなる喜びです。なぜなら、まさに今回のテーマどおり、いよいよ「次のはじまり」との思いを強く抱いていたからです。

在任中は研究と授業また学務にと、不十分ながらも気持ちばかりは追われる日々でした。しかしその中で、自分の生き方や人間の生きがいというものについて、常に考えをめぐら

せていました。その意味では、旧家政学部から人間科学部に変わったことは、私にとって大変困難な事態でしたが、まさに「おわりは次のはじまり」。この新たなはじまりがあって、研究内容が音楽の専門的なことから、人間はどう物事を捉え、それを考え、そしていかにそれを生かしていくべきかということに焦点を当てられるようになり、音楽文化論の授業でもそれを投げかけてきました。そのため幅広くさまざまなことを分析して読み取る機会が得られ、思考の範囲も広がり、そんな中で日々生きられることへの感謝と幸福感、そしてより大きな充実感が得られるようになりました。

これは小さな一例でしかありませんが、新たなスタートは新たな生きがいを生み、幸福感をも生み出すチャンスにすることができます。その意味で、私にとってこの退職は、まさに次のスタートを切る絶好のチャンスであり喜びです。しかしそれは、突然新たなことを始めるというのではなく、これまでの思考活動の延長上にあり、すべての時間がそれに専念できることへの喜びです。

卒業を迎えられた学生の皆様も、職場など新たなフィールドに入られることは、とても大きな不安要素となるでしょう。しかし、そこに入る前の人間も、入ってからの人間も、どちらも同一の人物です。つまりどんな場に置かれても、何らかの基盤をもった一人の人間として、自然体でありのままの自分を発揮していくしかありません。いかに演技しようとしても、ないものは出てきませんし、早晚化けの皮は剥がれてしまいます。そのため、一人の人間として、どんな基盤を持っているかが重要になってきます。そしてその基盤は、まわりの空気に振り回されない確かな判断基準・価値観・哲学などをしっかり持つことにより築き上げられます。つまり常に自分を客観視しようと努力し、また客観的判断が下せるよう、よりどころとなる確かな書物や哲理などへ常に近づき、自己修正しながら、より良い判断基準を作っていく必要があります。それが大学で学んだ者、社会を牽引していく者の努めではないでしょうか。そしてその流れの中で、自分の精神基盤がより磐石となり、自信をもって人々の役に立てられるのではないのでしょうか。

昨日までの自分を終え、今日また新たな自分を築いて行く。これが「おわりとはじまり」の意味だととらえています。今日より明日へ。昨秋もトークコンサート（券は完売！）をされた90歳の名ピアニスト室井麻耶子さんは何と、「最近やっとバッハがわかってきた」とおっしゃっていました。人は常に前を見つめ生きたいと思い、常に誰かの役に立ちたいと願うもの。人間とはそんな使命感が本能として備わった生き物のように思われます。人生の「おわり」である、死もまた新たな「はじまり」。次の良き生を始めるためにも、日々わが使命に生きたいと願い、自己の基盤をより高めようと楽しみつつ生きる。そんな最後の「おわり」を迎えられるよう、「次のはじまり」へ一歩踏み出したいと思っています。

出会えたことを神様に感謝

塩見 尚史 環境・バイオサイエンス学科教授

出会いには必然性があるようだ。

神戸女学院に来る1年前、車を運転していた私は右に曲がらないとだめな道を、間違えて直進してしまった。すると、思いがけない場所にペットショップがあり、なぜかその店に吸い込まれるように入った。なぜあの時、道を間違えあの店に入ったのか今でもわからない。ピーグルでも飼おうかと思っていた私達家族に、ペットショップの店長は「バンビ」のような変な犬を出してきてうちの子供とその犬を遊ばせた。その犬はウェルシュ・コーギー・ペンブロークという犬種で、私たちはその犬の不思議な魅力にひかれて「ピックル」という名前をつけて飼うことにした。後日わかったことだが、その店は、実はその日が店じまい。もしあの日、宿命の糸に導かれてその店に入らなければピックルに出会えなかった。「コーギーは妖精からの贈り物」、そんな言葉がびったりくるように、私達家族はピックルからたくさんの幸せをもらい、助けられ、私の大親友として過ごした。そして、「出会えた宿命」を神様に感謝しながら、彼は15年間を一緒に生きることとなった。

企業の研究所でバイオグループが無くなったのをきっかけに、企業から神戸女学院に来てはや15年。そのバイオグループは、コブクロの歌詞のように「ともに笑い、ともに目標をもって頑張った仲間」だった。しかし、会社のプレッシャーに押しつぶされ、一度はお互い気持ちも離ればなれになり、「もう会うことはないかも・・・」という気持ちの中で、それぞれの道を歩み始めた。ところが、その後多くのメンバーが大学や高専の教授になって、学会という意外な場所で少しずつ再会した。今では大学の先生になった10人のメンバーと会社に残ったメンバーも一緒になり、昔にもどってバイオグループの集まりや新たな仕事が開いている。「くされ縁」という言葉があるが、「宿命の糸」は思いもかけないところでつながっているものだ。

このように、人生のはじまりは、「宿命」によって決まり、おわりは、「次の宿命」への第1歩だ。信じてもらえないが、全く面識もなく話したこともない1年生に「この子は私のゼミに入る」と心にひらめく瞬間が私にはよくある。神様がそれとなく自分と「宿命の糸」でつながっており、自分に「ミッション」を与えている事のサインを送ってくれるらしい。だから、神戸女学院生のみなさんが、この大学に来たことや卒業後次の仕事に決まったことは、偶然ではなく必然なのだ。こんな経験から、私は今こうして神戸女学院に勤めており、ゼミの学生と出会えた偶然を常に神様に感謝するよう心がけている。みなさんも、この大学で出会えたこと、あるいはこれからの出会いを神様に感謝し、努力する気持ちを常に持ってほしい。そして、「宿命の糸」を1本ずつたぐりよせていってほしい。それが、人生の次のステップへの道しるべなのだから・・・。



後輩の皆さんへ

大川 佳那子 卒業生

女学院には魅力がたくさんありますが、その中でもヴォーリズ建築の中で勉学に励むことができたことは私たちの誇りです。落ち着いた空間に、細部にまでこだわった装飾、四季によって移り変わる雰囲気を感じることができ、充実した大学生活を送ることができました。その中でもぜひ旧図書館へ行ってみてください。そこで、なにもせずぼんやりするのもよし、レトロなランプの下で本を読むのもよし。その場所でしか味わえない穏やかで暖かい気持ちになれますよ。

ただ授業を受けにくるのだけでなく、学内のいろいろな場所を探検してみてくださいね！

## 〈本の花束 ーその9ー〉

館員の舞台裏

大西 裕子 図書館職員

図書館は毎年3月後半閉館しています。この理由をみなさんをご存知ですか。

ホームページや掲示では、「蔵書点検のため」とお知らせしています。

約2週間閉館して、どのようなことを行っていると思われますか。

そもそも『蔵書点検』って一体何なのでしょう。

まず、春期休暇開始から閉館前にかけて、『並べ替え』の作業を行います。

『並べ替え』とは、簡単に言うと「授業期間中に乱れた書棚をきれいに整える」ということです。例えば、3階に並んでいるべき本が、2階の全く違った書棚に並んでいる場合があります。そのような本を所定の場所へ戻し、本が乱れて並んでいる場合は整える、という作業を行います。

図書の背ラベルを1冊1冊目で確認しながら行う、とても地道な作業です。

図書館新館・音楽学部図書室の開架書棚全ての図書・楽譜を館員で並べ替えていきます。図書はもちろんですが、特に楽譜は資料形態や請求記号（本の背ラベルに表記されているもので、本の場所を表します）が複雑なため、とても大変です。

ちなみにこれは、夏期休暇中にも行います。

並べ替えは「よりきれいな状態で新年度を迎えられるように」「皆さんに、より快適に図書館を利用していただけるように」という意味も込めて行っています。

それが終われば、『蔵書点検』の作業です。

『蔵書点検』とは、「『図書館の本が無くならず存在しているか』を調べる作業」を指します。こちらも館員が1冊1冊手作業で、本のバーコードを機械で読み取って点検していきます。



そして閉館期間。ここは、蔵書点検のラストスパート期間です。図書館新館で蔵書点検が終わっていない所と音楽学部図書室開架書棚全ての蔵書点検を、急ピッチで行っていきます。

春期休暇開始～年度末、この期間は長く感じられるかもしれませんが、「毎年ギリギリで終わる」という感じです。

図書館では新年度に向けて、このようなことを行っているのです。

皆さん、書棚から出された図書はどうか返却台へ。それだけで、書棚はかなりきれいな状態を保てます。

それが、「誰もが快適に図書館を利用できること」「スムーズに本を探せること」「並べ替えの作業がスムーズに進むこと」に繋がっていくのでは？ まさに一石三鳥ですね♪

## 〈史料室から〉

ヴォーリズの問いかけに答えよう―「ヴォーリズ建築から神戸女学院を学ぶ」

勉強会開催―

佐伯 裕加恵 史料室職員

神戸女学院の特徴を語る上で忘れてはならないものの一つにキャンパスがあります。それは、単に美しいからというのではなく、学校の教育理念が理想の形として目に見える形となっているからです。このキャンパスに込められた思いについては以前に何回かに分けて Veritas に書かせていただきました。

理想の形、と私たちは考えているのですが、では、実際のところ、どの程度わかっているのでしょうか。改めて、ヴォーリズ建築を通して神戸女学院の精神を考えてみようということで、今回、初めて図書館・史料室主催で教職員・学生を対象にした勉強会を開催しました。講師には、元ヴォーリズ建築事務所所長で、永年神戸女学院のヴォーリズ建築のメンテナンスに携わり、その後の校舎増築も行なってきた石田忠範氏をお迎えしました。近年、ヴォーリズ建築が人々の注目を集める中、講演等でそのよさを伝える活動をされている多忙な石田氏ですが、快く依頼を引き受けてくださいました。打ち合わせの段階で、こちらからの希望として、ヴォーリズの精神が伝わるような話をとお願いしました。大学入試を控えた余裕のないスケジュールの中ではありましたが、2012年1月21日（土）13：30から文学館3室を会場に無事開催することができました。

この講演の主眼を一言で言えば、「神戸女学院の校舎は聖書のメッセージを伝えている」ということになるのではないかと思います。大切なものを大切に作っていくと人はそれを求めて集まってくる。―サグラダ・ファミリアを例に語られたメッセージです。神戸女学院の学舎は、若い女性たちを大切に「もてなす」、女性を「育む」建築です。ヴォーリズがこの学舎に込めた思い、つまり「建築家からのメッセージ」は、この建物を使う、私たち一人一人が見出していくことのできるものです。見出し、得ることのできるものがここにはあります。この「見出す」ことそのものが「教育」であり、ヴォーリズが語る「学舎が教育する」という考え方にほかなりません。この学舎は「洗練された趣味と美の観念を啓発する」といいます。この発想の原点は聖書に書かれた「識別すること、見分けること」（フィリピの信徒への手紙 1：9―10）です。ヴォーリズは建築家として有名ですが、本来は宣教師を志した伝道者です。設計思想の根底にはキリスト教があります。

神戸女学院のスクールモットーは「愛神愛隣」です。隣人愛を謳ったものです。ヴォーリスにキャンパスの設計を依頼した時の院長・デフォレスト先生は、キャンパスの完成時のメッセージの冒頭に「汝らは神の建造物なり」(コリントの信徒への手紙Ⅰ 3:9)という聖句を掲げました。ここから見えてくるのは、「愛神愛隣」の「愛神」とは人が神を愛するのではなく、神が人を愛しておられることを知ること、あるいはそのことに気づくことであって、その結果「愛隣」、つまり、隣人を愛することが可能になる、ということはこの学舎を通して知ることができる、ということです。言い換えるなら、神戸女学院のヴォーリス建築が語っていることは、私たち一人一人が「大切にされている」と感じることを、なのではないでしょうか。

このことは、たった一つの正解がある、という類のものではありません。各自受け止め方は様々でもいいのです。これこそが「教育」なのですから。

予定時間を大幅に超えて、ヴォーリスの精神を語ってくださった石田氏には、改めて感謝申し上げますと共に、今後もこのような機会を持つことにご助力いただけますようお願い申し上げます。

〈神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談 Xークリュブ・ド・ロネットム版  
『バルザック全集』全28巻（1955年）について—（その4）〉

柏木 隆雄 大手前大学副学長(元神戸女学院大学総合文化学科助教授)

1. 昨年末の騒動から新年二ースの古本屋

雑談の第Ⅸ回に「来春2012年1月に二ースに出かける。二ースの美術館の美本の『北斎漫画』が所蔵されており、それを家内と私の友人の日本近世文学の研究者夫婦と調査に赴く。ついでにその美術館で「ソラと日本自然主義」という題で講演もすることになった。その二ースに近頃廃業した古本屋さんがある。先代はパリで古書店を開いていて、私の恩師の赤木昭三先生にカタログを貰って、以来何度か注文し、店が二ースに移ってからもたびたび本を送ってもらった。バルザックの1955年の大衆版『全集』を破格の値段で買ったこともある。その親爺さんには30年以上の手紙のやり取りはあったものの一度も会ったことがない。こんど二ースに行くのも、じつはその親爺さんと会えると思ったことが一番の動機だ。すでに連絡はしていて、ぜひその講演を聞きに行く。そのおり古書の話をつらつらと言おうという返事も貰っている。」と書いたのは昨年12月も中旬を過ぎたころ、例によって、「次回もその古本屋の話から始まるのではないか」と懸念を表明していたことをご記憶の読者もあろう。

じっさい二ースに行って大した成果も事件もなければ何も記す必要はないけれど、やはり以下のことは記しておきたい。

それにしても昨年12月は実に忙しかった。ひと月に二回放送大学の面接授業をこなすことになり、まず高松学習センターでの講義。その時には志度湾で養殖する牡蠣を、シャベルで掬うとどさっと焼いた大きな鉄板の上に広げる。それを2時間限定で食べまくる、という牡蠣好きにはたまらない野趣豊かな料理を満喫した、その翌週は広島での講義。当然広島の美味を期待したとしても咎める人はいまい。

広島は高松と同じく金曜日に出かけたのだが、翌日からの講義を控えて、手ぐすねひいてくれていた友人たちと一献を傾けたのは良かったが、二件目は広島風お好み焼きとビール、さてホテルにタクシー帰ろうとしたら、久しぶりの邂逅でハイになったか、一人がいつか離さない。4、5分押し問答したあげく、タクシーを捨てて、彼の案内で横断歩道の信号が点滅しかかっているのを見て小走りになったとたん、アンウィリングリーの歩はたちまち躓き、ぱったりと大の字に地面に倒れる！ 見ると少し血が付いている。鼻血で

も出したか、大丈夫と言って置きあがったら、友人がこれは大変、救急車と携帯で呼び騒ぎ。切れどころが悪く下顎から多量に出血し、コートは前面血だらけ。深夜11時過ぎに駆け込んだ当直医はまだ若いけれど、悠々迫らず、手際良く縫ってくれた。中に3針、外7針。縫っている間に「先生、明日講義ですが、大丈夫でしょうか」「大丈夫でしょう。」「明日飲みに行かないといけないのですが、ダイジョウブでしょうか?」「それはあなたご自身が決めることでしょう」とのやり取りのあと、携帯につながった家内の叱り声で、怪我が現実であることを覚るといふ始末。痛み止めと化膿止めをもらってホテルに帰ったのは11時半すぎで、親切なその友人は自宅は随分遠いのに、ずっと付き添っていてくれた。翌朝起きたら右頬が腫れ、下顎はどこかの農林大臣のように絆創膏が大きく貼られて、みっともなかった。

2日間の講義も無事済み、西宮の外科で抜糸は終わったものの、その傷を触ると多少痛みが残るまま、1月4日にパリを経由してニースへと出かけた。先にも書いたようにニース美術館にある『北斎漫画』全15冊を書誌的に調査しようということで、国文学者の飯倉洋一先生と森田帝子先生と一緒することになった。(これは現地に着いて美術館での2日間のつぶさな調査を行い、お二人の専門家のご努力のおかげで予想以上の成果を得たが、報告書も別に用意しているのでここでは詳述しない) シャルル・ド・ゴール空港について1時間ちょっとの待ち合わせでニースに行きに乗り換え、ニースに着いたのは夜の八時半くらいだった。

すでに私たちが行くことをメールで伝えてあったので、30年来の手紙の往来はあってもまだ面識のない古書店主ヒルラム氏は、大きく Hirlam という名を白い紙に書いたものを持って、到着ゲートに迎えてきてくれた。私は飛行機の中で家内とそのヒルラム氏が痩せた人物か、肥満した人物かをあてっこして、妻は肥えた人と言ひ、私は痩せた人で賭けたが、勝負は家内の勝ちで、赤ら顔のやや太り気味の好人物であった。私たちの荷物は小さいキャリーバッグだったが、飯倉先生たちは初めてのフランス旅行とあって、手荷物他に大きな海外旅行用のスーツケース2個持ってこられたので、ヒルラム氏の大きめのワゴン車に荷台にやっとこせで押し込む形になった。もし彼が迎えに来てくれなければ、タクシー二台で荷物料金も取られることになったはずで、ありがたいことだった。

さすがに日本から発って飛行機や乗り換えで20時間以上眠ってはず、ようやく目的地に着いたことで、どっと疲れが始めたが、運転席のヒルラム氏は上機嫌で、客にニースの見どころを見せようと、空港からホテルに行くまでの間、わざわざ回り道をして、これがモーパッサンの小説にも出てくる「プロムナード・デ・ザングレ」(イギリス人の散歩道)、これが有名なカジノ、さらにはホテルなど説明つきで案内してくれる。ホテルについたのは9時過ぎ。それから彼の紹介で、一緒に地元料理を食べに行った。そこでキールをアペ

リティブに、ワインはこれも土地のものを頼んで、さてゆっくりと、（とは言いながら、お互いせき込むように）本の話、古本屋の話に興じた。

## 2. ダルジャンス書店

ヒラム氏のお父さんは、いわゆる「せどり」というのか、いろいろ市内外の古本屋を回って安い掘り出し物があるとそれを買って、大きな古本屋に持ちこむ。その一軒がダルジャンスだった。ダルジャンス書店については、この連載のちょうど一年前のヴェリタス46号で、1994年のフランス滞在の際、私がパリの古書肆で買い集めた本を親しい店数件に日本送付をお願いしたことを書いた部分で、「ソルボンヌ前のニゼ書店とリュクサンブール公園近くの古本屋、そしてボナパルト通りのダルジャンス書店の4軒が快く一かどうかは知らないが一引き受けてくれて、せっせと4軒にその店で買った1、2冊の本と合わせて、他の古本屋で安く見つけた本を持ち込んで送ってもらった。」と書いた。その4軒のうちのダルジャンス書店ではない。それは番頭として働いていたヴァション氏が後を襲ったもので、ニースの古本屋のヒラム氏の父親が本を持ち込んでいたのは、その元の主人で、背の高い、大柄の主人で、これも「ヴェリタス」第45号の「雑談」Ⅶで話題にしたピノー書店主に風貌は似ていたが、彼が商売人、実業家風とすれば、ダルジャンスの主人はむしろ学者風だった。

1981年秋から1982年7月まで神戸女学院大学から留学させてもらった時に、このダルジャンス書店にも何度か訪れた。すでにカタログで注文していたこともあって、或る時、その背の高い学者風のダルジャンス主人がこれは今出来上がったカタログだけれど、見たければ上げる、ただし、このカタログはパリではまだ誰も見ていない。だから今日の今、注文を受けることはできない。明日の開店の時から注文を受け付ける、と言った。主人の話から、海外にカタログを送るのは、そのもっと先で、数日前に郵送することがわかった。つまり全世界でほぼ同一の時間にカタログをみることができるようになっていると言うのだ。

これは実に公平な話で、私はその話を聞いて感動した。そしてそのまま下宿に帰って新しい買ったばかりのカタログを一頁、一頁丹念に記しをつけていった。沢山欲しい本が並んでいる。今すぐにでも電話をかけてほしい本を確保したかったけれど、主人の言葉を思い出して、翌朝になるのを待ち、夜が明けて開店時間に間に合うように出かけることにした。10時の開店だから、それに合わせて13区のアパート（これは私の女学院大学の後任となった上西妙子さんが住んでいたアパートで、彼女がそこを引き払う折に替わってもらったのだ。地下鉄ゴブラン駅から徒歩5分くらいのところにあった）を出て、ボナパル

ト通り、サン・シュルピス大寺院の傍にあるダルジャンス書店に弾む心で足を運んだ。ところが既に店は10人近くが本を買い求めていて、私が絶対に欲しいと思う本の多くがすでに売約済みとなって、悔しい思いをした。正直に開店に合わせてやってきたのがアダとなった。こういうときには開店前から並んでいるべきだったのだ。しかしこの経験は古書店の誠実さを実感させるものだった。

この学者風のダルジャンス主人を今ニースで一緒に食事をしているヒルラム氏は大いに尊敬しているようで、高校を出て、彼はアルバイトにダルジャンスの顧客の注文した本を国内外に送る荷づくりを手伝っていたという。それが独立してお父さんと古書店を始めたのが、1982年頃で、まさしく私が女学院から留学した時なのだが、これも「雑談」の最初、ヴェリタス第38号に「留学期間中は柄にもなく博士論文を書こうと思い立って、講義に大学へ出かける日を除いて、太陽の射している間は、小さなステュディオに立てこもって執筆に明け暮れるはずだったので、最も大きな誘惑である古書店めぐりを自ら厳しく禁じて、たった一軒、家内が学生時代を過ごしたポーランド系の女子修道院が経営する女子寮の寮母さんを訪ねる際に、ついその近くにある小さい古本屋だけ覗くことにしていた。」と書いたように、古本屋めぐりをしないようにしていたので、カタログは受け取っていたはずだが、パリの北駅近くにあった彼ら親子の店には一度も訪れたことがなかった。ニースに移ったのは今から20年くらい前のことになる。

ニースに移ってからもいろいろ大口の顧客があり、特に作家の故大仏次郎はヒルラム氏のカタログを見て、彼が蒐集している19世紀末のパリコミュン関係、ドレフュス事件関係の本をトラック何台分も買い取ったという。ある著名な日本の古書店から彼が出したカタログの全点に○印をつけて注文してきたそうで、実際かれは彼のカタログの全書籍名にマル印をつけた注文票を見せてくれた。おそらく日本の大学や学者が彼の店でどんどん本を買っていた名残である。

けれども世はインターネット検索、販売の時代に入った。そして学者や学生が本を店頭で見て、店主と雑談しながら目についたものを買求めることはだんだんに無くなり、一昨年の夏を限りに店を閉じることになったのだ。そういえば1980年代の半ばくらいに、先に述べたダルジャンスのカタログが送られてきて、それは「最後のカタログ」とあり、一番後ろの頁には *Ultima verba*（最後のことば）が印刷されてあった。書店を残念ながら閉じるということを美しいフランス語で書かれており、最後に「しかし書店は何度もフェニックスのように甦ってきた。この書店もあるいは。」と結ばれていた。このカタログは貴重だと思って残していたはずだが、今どこにしまい込んだか、急の役に立たない。



ダルジャンス書店は、店舗も看板もそのままに、ヴァション氏が続けており、真面目な仕事ぶりで知られている。いまからちょうど6年ほど前にパリで客死した若い友人の沢山の書籍を処分するのに、彼に頼むことにした。後輩たちは、小柄なヴァション氏がコマネズミのように書籍を分類して段ボールに詰め込んで、それを軽々と運んでいった技量と版力に驚嘆の目を見張ったという。ある時まだ持っていなかった新刊の大型辞書4冊がヴァション氏のカタログに載っていたので、注文したら、届いたのはその若い友人の旧蔵書だった、という因縁話。

そんなことをニースの名物料理に舌鼓を打ちながら、せき込んで話した最後に、2002年に阪大の仏文院生諸君の手伝ってもらって作成した架蔵のフランス書の私的カタログ、『水鳥荘文庫目録』を呈したら、とても喜んでくれて、お返しに横浜にある大仏次郎記念館の出したパリコミュニケーション関係の蔵書目録をくれた。

そういえば『水鳥荘文庫目録』は私家版として100冊印刷して諸方に呈上したが、ヒルラム氏に差しあげて、もう残り数冊になっている。出してから10年ちょうど経つのと、フランス書がほぼ一万冊になる。それを機会に、第二版を出そうかという話になり、今度は前回のように知り合いに送るのではなく、ほしい人に予約を募って必要な人だけに配ったらどうだろう。初版以降に購入した本のリストは初版以後補遺として、本を購入するたびにパソコンに打ち込んでいるから、すぐできると思う、ということ、ヒルラム氏は大いに賛同して、私がパリを離れる日に、その予約者の一人になるとニースからメールを送ってきて、パリを出る日にメールを送ってきた。果たして第二版ができるのか、どうか。そして予約購読者の第2号以下、続々出てくるのか、どうか、お楽しみ、というところだ。

ヒルラム氏は翌日もお父さんの介護で病院に出かけなければならないところを、おそらく聴衆が少ないだろうと気を利かせて、翌日ニース美術館での私の講演にまで出席してくれた。講演は南国晴れの午後、17世紀から18世紀の絵画の展示室で時には講演会場となる天井の恐ろしく高い一室で行われた。これは美術館がもともとロシア皇帝の息女の別荘であったのを金満家が買い取り、ニース市に寄付したものだそうで、まことに館の最上階から眺めるニースの町は、「睥睨する」という言葉ぴったりの絶好の高みにある。

さて講演会場には椅子が100席以上も並べられていて、まさかそんなには来まいと思った通り、せいぜい30人くらいだったが、ヒルラム氏は最前列に陣取って男気を示してくれた。ニース到着の夜のレストランでの写真とニース美術館での写真を添えておこう。私を紹介しているまるで人魚みたいに髪の毛の長い女性は館長である。



講演を終えた私にヒルラム氏はお土産にと言っ、先に述べた大仏次郎記念館の蔵書目録と、それから彼の長い間の友人であるフランス文学研究者のパトリック・ベルティエが注をつけたガリマール社発行の文芸文庫フォリオのバルザック『地方のミューズ』を送ってくれた。ベルティエのヒルラム氏に捧げて骨太のペンで書いた献辞があるので、これは貰うに忍びないと言ったのだが、お前が持っていた方が良い、とって押しつけ、最後に小声で、「それにしても去年ブラッサンス広場の古本市であんたの買ったミシェル・レヴィー版は、実に買い物だったな！」と昨夜の話を思い出して囁き、「オールヴォワール（またね!）」と言って父親の介護をしに帰って行った。

### 3. コナール版『バルザック全集』

さてようやく、この連載の肝心のテーマである神戸女学院大学架蔵のオネトム版『バルザック全集』を説明するにあたって、バルザック死後に編まれた全集の話に戻ることになる。これまで長い与太話にお付き合いいただいてまことに恐縮。なるべく脇道にはそれず、これからは一目散に完結へと走りぬけよう。

20世紀に入って19世紀文学の研究がようやく印象的な批評から科学的なものとなり、大学で19世紀文学を講じる研究者も多くなって、たとえばアシェット社など高校の教科書や古典文学から19世紀前半の文学の校訂版全集を『フランス大作家叢書』として成功させたりして、実証主義的資料の裏付けのある作品集が出版されて高く評価された。そしてフランス・ロマン主義が生まれてほぼ100年経ったことを踏まえて、1910年から20年代、シャンピオン社からスタンダールやメリメ、ネルヴァルの全集が編纂され、コナール社からヴィニーやボードレルの全集なども計画された。

1930年代のバルザック研究で大御所的な位置にいたマルセル・ブトロンが中心となり、資料的、実証的な部分はおそらくロンニョンが力を尽くしたと思われるコナール版『バルザック全集』全40巻が出たしたのは1912年からで完結は1940年。最後の第40巻は1～3と三分冊でできるほど、資料的な部分を重視したものとなった。このコナール版、全巻揃って行きわたるのは戦後で、これは実に値の高い本だった。つい10年前にでも、全巻揃うと4、50万の値を日本の古書カタログでは付いていたものである。フランスではさほどの値段ではなかったが、日本ではコナール版の威力は抜群で、それというのも邦訳全集や文庫の定本には必ずと言っていいほど、コナール版全集が使われていて、それがまた一種の権威づけになっていた。このコナール版全集についてもう少し述べたいが、原稿締め切りの期日がせまったら、あまりに与太を飛ばし過ぎて紙数も増えてしまった。今回もまた尻切れトンボで終わる不体裁をお許し願いつつ、次回を期したい。